幼年教育研究年報　第42巻　27－35
The Annual Research on Early Childhood, 2020

大正，昭和初期における先住民アイヌの子育てと保育
― ジョン・バチラー，バチラー八重子による平取幼稚園と日曜学校を中心に―

島津　礼子[1]・七木田　敦[2]

Child Rearing and Early Childhood Education and Care of Indigenous Ainu in the Taisyo Period and Early Showa Era
—Focusing on the Biratori Kindergarten and Sunday School founded by John and Yaeko Batchelor—

Reiko SHIMAZU[1] and Atsushi NANAKIDA[2]

Abstract: In the Taisyo Period and Early Showa Era, Japanese indigenous Ainu school age students were under the assimilation policy of the government. They were also restricted from using the Ainu language and discriminated against by Japanese students at school. This study focused on traditional Ainu child rearing and the early childhood education and care at the Biratori Kindergarten and Sunday School founded by John and Yaeko Batchelor. We attempted to identify the contents and purpose of the establishment of these schools by using historical documents, the Batchelors' writings, and interviews with those who attended the school. Our findings were as follows: 1) Ainu and Japanese children played together; 2) Ainu language and culture were not restricted but used for children's education at Biratori Kindergarten and Sunday School. Thus, we concluded that John and Yaeko Batchelor hoped that Ainu and Japanese children would understand each other in their early years during a time period that was hard for the Ainu people.

Key Words：Ainu, John Batchelor, Yaeko Batchelor, Biratori Kindergarten, Indigenous

１．問題の所在と研究の目的

(1) 大正，昭和初期におけるアイヌ児童への教育

大正ならびに昭和初期において，アイヌの学齢期の子どもたちは，1899年にアイヌ保護の名目において制定された北海道旧土人保護法（以下，旧土人保護法）のもとで，教育を受けていた。小川（1997）は，貝澤（1993）の次の回想を取り上げている。「シサムは白い米を常食とし柾屋の住宅に住み身なりもキレイだ。アイヌはヒエ・アワの常食，茅葺きの小さな小屋，焚火で煤臭いきたないなりだった。祖父は長い髭を生やし祖母は口のまわりに入れ墨をして，父はいつも酒を飲んでは母と口論をし，家庭内は常にゴタゴタがたえない。こんななかでの生活は私に“シサム（和人）は良いものだ”と思わせ，私は“シサムになりたい”，そのことだけを思い続けて成長し大人になった」（貝澤，1993，p.5-7）。小川（1997）は，このような告白を，旧土人保護法下の学校教育の実態を証言する告発としてとどめるのではなく，アイヌが「シサムになりたい」と感じざるを得なくなった過程にこそ目を向けるべきだと述べている。末武（1971）は，アイヌの子どもたちと一緒に勉強していた小・中学校では，アイヌの子どもたちは「アイヌと言われることをひどく嫌い，一日でも早く，和人と同等の日本人となりたい」（末武，1971，p.7）と願っていたと述べている。近年の調査においても，品川（2016）によれば，現在老齢の人ほど子どもの頃に親がアイヌ文化にふれることに消極的であったことが

1　広島大学大学院人間社会科学研究科
2　広島大学人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設

明らかなっている。このような実態を踏まえ，小川（1997）は，アイヌ自身がアイヌの伝統文化継承を断念せざるを得ない痛切な判断があったことを指摘している。

明治政府によるアイヌ政策は，1869年に蝦夷地を官有地とし，その名称を北海道と変更して開拓使を設置した頃より大きく動き出す。1871年，戸籍法の制定とともにアイヌは平民に編入され，和人に倣った姓名への改名や日本語の使用を強制された。政府はアイヌの人々を旧土人という呼称に統一した。サケの禁漁や不耕作地への強制集住などの政策により生活が立ち行かなくなったアイヌを保護する名目で，1899年に明治政府は北海道旧土人保護法を制定したのである。同法では国費によってアイヌ児童のための小学校を設立する計画が立てられ，1912年までに北海道内に21校が新設された。1916年の調査においてアイヌ児童の就学率は96.6％に高まっており，就学率の向上という面で学校の新設は一定の成果を上げている（榎森，2018）。しかしこの頃，学校ではアイヌ語の使用が禁止され，アイヌの子どもたちが和人の子どもたちから，時には教師からも差別を受けるといういう事態も多く見られた。また，アイヌの小学校における教科内容・修業年限が，一般の小学校よりも劣ったものであったことは，多くの研究者が指摘している（松本ら，1977；小川，1997；榎森，2018）。1901年の旧土人児童教育規定では，アイヌの小学校で教えられていた教科内容は，修身・国語・算術・体操・裁縫（女子のみ）・農業（男子のみ）の実質５教科であり，地理・歴史・理科の科目はなかった。1916年にはさらに改悪され，修業年限は４年に，就学年齢は満７歳とされた（榎森, 2018）。貝澤の「シサムになりたい」という思いは，このような教育環境の下で発せられたのである。

(2) 問題の所在と研究の目的

しかし上述のように，アイヌの学齢期の子どもたちの教育課題を指摘する研究が多い一方で，同時代において就学前のアイヌの子どもたちがどのように育てられていたのかを知る資料は少ない。松浦（2012）によれば，北海道内に初めて幼稚園が開設されたのは1883年に開園した函館師範学校附属仮設幼稚園である。北海道では開拓使により早くから幼稚園の開設が計画されていたものの，当時は教員の養成機関が限られており，極端な教員不足であったという（松浦，2012）。そのため明治期から昭和初期の北海道における幼稚園の嚆矢は，宣教師らに負うところが大きかった。

本稿は，大正，昭和初期において学齢期のアイヌの子どもたちが過酷な教育環境にあった中で，同時代の就学前の子どもたちがどのような保育を受けていたのか明らかにすることを目的とする。大正，昭和初期には，伝統的なアイヌの子育て方法も行われていたことから，はじめにアイヌの子育ての方法について整理する。その上で，アイヌと和人の子どもたちの両方を受け入れる幼稚園として開園した平取幼稚園と，教会の日曜学校に焦点を当てる。平取幼稚園や日曜学校の概要を明らかにするとともに，政府の同化政策によりアイヌの人々の民族意識が高まる中，これらの施設の設立や運営にかかわった人々が目指した目的，子どもたちへの思いを明らかにする。これらを明らかにするために，文献調査と関係者へのインタビューを実施した。現地調査とインタビューは, 北海道札幌市, 沙流郡平取町，伊達市，伊達市有珠において2019年5月と7月に行った。調査資料は，平取幼稚園に関する文書1冊，平取幼稚園を設立したジョン・バチラー[注1]の養女である八重子が遺したアルバム4冊，写真29枚，蔵書（和書９冊，洋書７冊），ノート，雑記帳，覚書など37編，日記５冊である。このうち手書きの文書はワード化して整理した（A4サイズ53ページ分）。

２．アイヌの子育て

(1) アイヌの信仰と子育て

はじめに，アイヌの出産や子育ての方法[注2]と，その基底にあるアイヌの信仰について述べる。一般的にアイヌの家庭では，子どもがとても大切にされていたと言われている。当時，北海道に入植した和人が志を果たせず本州に引き上げる際には，子どもを置き去りにすることもあったという。その時，アイヌの家庭に子どもを残していけば育ててもらえるといった言説もあったほどである。アイヌの出産と子育てには，カムイを中心とするアイヌの信仰が色濃く反映されている。アイヌは多神教であり, 山や川, 火, 動植物，生活用具など，とりわけ人間の役に立つものをカムイとして敬ってきた。知里(2000)は，アイヌのカムイの概念は，狩猟採集を行う生活者としての立場と，狩猟採集した動植物をカムイとして敬う宗教者としての立場との巧妙な調和の上に成立していると述べている。すな

わち，クマもサケもそれが直ちにカムイなのではなく，カムイはその国においては人間と同じ姿をしており，アイヌの世界に降りてくる時，クマやサケの姿を借りてやってくる。その肉体はカムイがアイヌに持ってくる土産であるので，神意に沿ってそれらの肉を頂き敬う（知里，2000）。このような考え方が，アイヌの生活と信仰の両方に貫かれている。

以下では，萱野（2005），武隈（1998）などに負い，アイヌの子どもたちの誕生から成長するまでの様子を述べる。出産が近づくとアペフチカムイ（火の神）とルコロカムイ（お手洗いの神），チセ（家）の中の下座にいる神であるウサルンカムイに，無事に子どもが生まれるように祈りが捧げられた。とりわけ，ウサルンカムイは出産をつかさどる神とされ，難産の時にも祈祷が捧げられた。出産が始まる前に，妊婦がよりかかるためのリエニヌイペ（ヒエやアワを穂のまま袋に詰めたもの）と梁からぶら下げてすがるためのタㇲ（縄）が準備された。このようなお産の風習は，昭和20年ごろまで続いていたという（萱野，2005）。生まれたばかりの赤ん坊には，長生きした人の古い着物などが着せられた。清潔さよりも，むしろ汚れているほうが良いとされ，幼名には「ぼろにくるまったもの」とか，「垢がついたもの」といった意味の名が付けられた。清潔でかわいらしい子どもを見ると，悪いカムイが寄ってきて連れ去ってしまい，子どもが無事に育たないと考えられていたためである。事実，乳幼児の死亡率は高く，「旧土人に関する調査」によれば，1912年から1916年においてアイヌの子どもたちは結核，トラコーマ，皮膚病などに罹患することが多かったようである。困窮した生活が原因だと思われる栄養不良，身体虚弱，貧血なども多く見られた。アイヌの小児死亡率は，人口1,000人当たり１歳未満児では６名，５歳未満児では11名であり，和人のそれぞれ４名，６名という割り合いよりも高い比率であった（小川，1997）。

(2) 子どもたちの成長と遊び

子どもたちは，日常の生活や遊びを通して，狩りや植物の利用方法を学んだ。草木を利用して小動物のわなを作る方法や，サケを無駄にしない食べ方や保存方法なども学んだ。とりわけイオマンテ（熊送り）は，アイヌにとって最も大切な儀式であり，12，13歳になると男の子は熊狩りに加わっていたという。小さな子どもたちは親や兄たちが獲物を持ち帰るのを待ちきれず，小さな熊送りの儀式を行っていた。ねこやなぎの花に炭をつけて小さなクマを作り，それを真ん中に置いて，弓や笹を束ねた手草を持ち，手を叩いたり，足を踏み鳴らしたり，輪舞したりしながらその周りを回った。そしてクマが死んだと言って，ねこやなぎで作ったクマを祭壇に祀った。大人たちが行う本当のイオマンテの模倣であると同時に，カムイであるクマが喜んでアイヌのところに来てくれる，つまり大人たちの狩りがうまくいくことを祈願する意味も持っていた（更科，1996）。

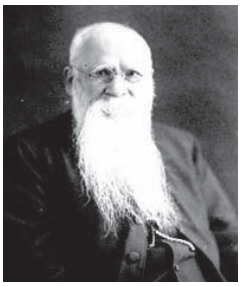
アイヌは文字を持たなかったが，子どもたちはユカㇲ（神謡）やウウェペケㇾ（昔話）といった豊かな口承文芸の世界に浸りながら育った。子どもたちに，年寄りを大切にした子どもが，カムイに守られて幸せになった話や，サケなどの食べ物はアイヌだけのものではなく，すべての動物が分け合うよう天から降ろされたという話を繰り返し聞かせていたのは，主に老人たちであった。祖母は孫娘に，家の中で焚く火について，火のカムイを怒らせないように注意深く扱うことや，針を大切にして針仕事を上達させるように，日々言葉を掛け技術を授けた（萱野，2020）。武隈（1998）によれば，アイヌの家庭教育の目的は明確だった。第一にカムイを敬うこと，第二に両親に従順であること，第三に目上の者を尊敬すること，第四に老人を敬うこと，第五に人から問われていないことを自ら語らないこと，第六に目上の者の談話に口を挟まないこと，である。男子は，漁猟の方法，弓矢や罠を作る方法，地形の形状と名称を学んだ後は，毒矢の製造法，器物の製作法，彫刻を習い，最終的に信仰するカムイの名や祈祷に用いるイナウ（弊）の作り方，祈祷文，儀式の進行，古来の伝説などを修めた。女子は木皮より織物を作る方法，刺繍，料理，子育ての方法，舞踏，死人のための泣哭の仕方，分身の技術，男子に対する礼儀について学んだという（武隈，1998）。

しかしながら，このような子育ての方法や遊びは，北海道の開拓と和人の流入が進むにつれて徐々に失われたり変化したりしていった。その背景には，「アイヌ固有の習俗，言語等を“弊習”として否定し，日本の文化に倣うことを強制する」（竹ケ原，1976，p.299）政府の同化政策が強く影響していた。

3．ジョン・バチラー，バチラー八重子による平取幼稚園

(1) ジョン・バチラーとバチラー八重子

ジョン・バチラー（John Batchelor，1854-1944）はイギリス人であり，キリスト教の教派の一つである聖公会の宣教師であった。東洋伝道ならびに自身の療養の場所として，1877年に北海道函館に上陸した。その後，アイヌの保護と教育，伝道に一生を捧げ，アイヌの父とうたわれた人物である。バチラーは，まず自ら学ぶという教育観を持っていた（バチラー，2008）。アイヌの人々を理解し信頼を得るためには，アイヌ語の習得が不可欠と考え，コタンの長から熱心にアイヌ語を学んだ。1889年，世界初のアイヌ語辞典である『蝦和英三対辞書』（バチラー，1889）を編纂するとともに，アイヌ語訳の聖書も著している。バチラーが現在の北海道伊達市有珠のアイヌの集落であるコタンに立ち寄った際に，集落の長であった向井富蔵（アイヌ名:モロッチャロ）の歓待を受けたのが，後に養女となる向井八重子（1884-1962）との親交の始まりであった。



ジョン・バチラー

バチラー八重子

図１　ジョン・バチラーとバチラー八重子

八重子は，父である向井富蔵と母フッチセの次女として1884年に生まれ，幼名はフチといった。彼女は８歳の時，両親に無断でキリスト教の洗礼を受けている。八重子が12歳の時父富蔵が逝去すると，それまで不自由なくすごしていた家族の生活は一変し，急速に傾いていった。八重子は22歳にその聡明さが見出され，バチラーと妻ルイザ夫妻の養女となり，以後バチラー八重子と名乗った。八重子は1909年には養父母とともに渡英し，滞在した約１年の間にイギリス各地をまわってアイヌの窮状を訴えている。

八重子はキリスト教の伝道に熱心に打ち込む傍らで，アイヌの置かれた状態を歌に詠み，歌壇においても活躍した。八重子の歌は，アイヌ語研究の創始者と言われる金田一京助や，歌人で国文学者の佐佐木信綱らの目に留まるところとなり，1931年には八重子の歌集『若きウタリに』（バチラー, 2003）が出版された。八重子は，アイヌ出身で金田一に師事し東京帝国大学大学院で言語学を修めた知里真志保や，歌人であり社会運動家でアイヌの地位向上の運動に尽くしながらも夭折した違星北斗，ユカㇲを伝承した金成マツらとも親交を持っていた。

(2) 平取幼稚園の創設

1923年ジョン・バチラーは，北海道沙流郡平取町本町にアイヌと和人の子どもの両方を受け入れて保育する平取幼稚園を開園した。北海道では幼児のための保育施設はまだ珍しかった時代である（平取町二風谷アイヌ文化博物館，2016）。開園にあたっては，東京の社会事業家であり点字の普及やハンセン病患者支援，アイヌ支援など数々の社会活動に尽力した後藤静香（1884-1971）の援助があったという。園長は，八重子の末妹である岡村千代子であり，八重子もしばらく幼稚園で働いていた。開園の年に撮影された写真には，園長の千代子と園児21名（記録では22名が在籍）が写っている（日本聖公会北海道教区平取聖公会，2009）。

図２　平取幼稚園開園当時の園長と子どもたち
（日本聖公会北海道教区平取聖公会，2009）

園児たちは，着物にスモック姿，袴姿，長いたけの学生服を羽織るように来ている子どもなど，様々な服装をしている。平均出席数は，夏は25人，冬は18人程度であった（仁多見，1991）。平取幼稚園では，アイヌと和人の子どもが分け隔てなく一緒に遊びすごす保育がされた（バチラー，2008）。バチラーは，アイヌの子どもたちが最も大切にすべきものは，アイヌ

語であると考えていた。先に述べたように，当時アイヌの子どもたちは，学校に行くとアイヌ語の使用を禁止されていた。アイヌと和人の児童両方が在籍する学校においては，アイヌの子どもが和人の子どもたちから差別的な言葉を投げかけられたり，棒で追い掛け回される，といったことが日常的に起こっていた。

違星北斗は，1926年に平取に滞在して八重子や幼稚園に親しみ，幼稚園については日記に「此の村になくてはならぬものの一つ」（違星北斗の日記，1926年8月13日[注3]）と記している。後に，アイヌの昔話が収められた雑誌『子供の道話』を，平取幼稚園を含めた複数のアイヌの小学校に贈っている。『子供の道話』大正15年10月号には，バチラー八重子が伝承し，違星北斗が文責と記された「半分白く半分黒いおばけ」の物語が収録されている[注4]。このようなアイヌ伝承の物語について違星は，「私は今アイヌの児童に美しい心を植へて行くには，先ず己が一番近い趣味から入れたいと存じます[注5]」と書簡に綴っている。「半分白く半分黒いおばけ」の話は，乱暴な兄の陰謀により，半分白く半分黒い顔をして，半分白く半分黒い着物を着た巨人のいる島に置き去りにされてしまった心の優しい弟が，巨人と心を通わせて助けられ，宝物を貰って帰る，という物語である。この物語の原型と思われる文章が，筆者らが調査した八重子の雑記帳にも記されており，そこには「半分白く半分黒い」という表現が，何を意味するか明らかにされていた。白は人の心の清さや他者を信頼できる心を表しており，黒は人の邪悪さや他者を信用できない心の象徴である。「半分白く半分黒い」とは，その両面を一人の人間が合わせ持っていることを意味している。つまり，一人の人間は二面性を持ち，巨人は優しい心を持つ弟と出会ったことで心の清さが引き出され，弟を助けたと解釈できる。八重子の日記や雑記帳には，キリストの生誕や復活，説話のみならず，このようなアイヌの物語やアイヌ語の文章，アイヌ語の短歌などが綴られていた。平取幼稚園の子どもたちも，アイヌの物語とキリストの説話の両方を楽しんでいたのかもしれない。

しかし，バチラー幼稚園は後藤静香からの資金提供の打ち切りが決まり，開園からわずか５年（1928年）で閉園となってしまうのだが，バチラーがどのような意志を持って幼稚園を開園したのか，奇しくも後藤が閉園の経緯を記した書簡によって明らかとなった。

あの平取には，バチラー氏経営の幼稚園があり，それが経営に困っているというので，私が毎月百円ずつ相当長い期間に亘って送りました。氏の意見によって，小学校になると，アイヌ部落のものと一般の子どもとの融合がむつかしい。幼稚園時代から親しませるに限る，というのです。

それは尤もだと思い，前記の様な応援をしていたのです。その当時の百円は決して少額では無かったと思います（大正十年頃[注6] からと思います）。しかし，一つは伝道の方便でもあり，且つ何分にも外人を介しての事で，私の気持がどの程度通じているやら分からず，中止しました。（後藤静香が教育者でありアイヌ史研究家である木呂子敏彦に宛てた書簡，1954年４月21日[注7]）

後藤の書簡によれば，バチラーは学齢期になると，アイヌと和人の子どもとの融合が難しいことを認識しており，幼児の頃からお互いに親しむ環境を作ることが大切だと感じて平取幼稚園を開園したのである。先述のように後藤は，社会事業の一環としてアイヌ支援にもかかわり，東京に訪ねてきた違星に対しても度々資金援助を行っている。違星は，平取教会の司祭で岡村千代子の夫である岡村国夫とともに，後藤とバチラーとの交渉の間に立ち苦悩していたことを日記に綴っていた（違星北斗の日記，1926年８月11日，８月14日[注8]）。後藤は書簡に「一つは伝道の方便でもあり，且つ何分にも外人を介しての事で，私の気持がどの程度通じているやら分からず」と記している。後藤は，幼稚園の事業を「伝道の方便」と非難し，バチラーを「外人」と表現して遠ざけている。バチラーと後藤の二人の間に，幼稚園の運営に関して致命的となる齟齬があったことを示唆している。1940年，太平洋戦争の影響により，バチラーは敵国外国人としてイギリスに帰国せざるを得なくなった。その意志は八重子の日曜学校へと引き継がれていった。平取幼稚園は戦後の1949年，バチラーの名を冠されバチラー保育園として再び同地に開園した。現在も続く園ではキリスト教精神に基づいた幼児保育が行われ，園児たちは保育室に掲げられたバチラーの肖像写真に見守られてすごしている（平取町立二風谷アイヌ文化博物館，2016）。

4．バチラー八重子による日曜学校

(1) 日曜学校の内容

バチラーが帰国した1940年以降，八重子は生まれ故郷である現在の伊達市有珠に戻り，教会で日曜学校を催した。バチラー・掛川（1964）によれば，日曜学校には，アイヌと和人の子どもたちが足を運び，八重子が準備するイチゴやせんべいを楽しみにしていた。クリスマスには，八重子が子どもたちに教えた歌やキリスト生誕の劇などが地域の人々に披露され，大変な賑わいであったという。天候の良い季節には，青空日曜学校として屋外で行われることもあった（バチラー・掛川，1964）。日曜学校でもアイヌ語は大切にされ，讃美歌がアイヌ語で歌われた。八重子がアイヌ語で説教をする音声も残っており，有珠にあるバチラー夫妻記念堂において筆者も聴くことができた。

子どもの頃八重子の日曜学校に参加していたA氏は，当時の様子を次のように述べた。

幼稚園などない時代なので貴重だったんでしょうね。飴を紙つつみでもらった記憶があります。どんな話を聞いたかは全く記憶がありません。当時の有珠の状況は宗教的な雰囲気があった訳ではないので，日曜学校は「みんな仲良くしなさいね」というような雰囲気だったかもしれません。アイヌの子どもと混ざっていたと思いますがどの程度か記憶にありません。少なかったと思います。

日曜学校は教化という目的もあったに違いないが，子どもたちが日常の生活の中でキリスト教の教えや行事，日本の行事やアイヌ語にもふれる機会だったようである。八重子は有珠の子どもたちについて，雑記帳に次のように記している。

初めの子らはサンパツやのまねや馬方のまねなどして，又おすもうやら遊ぶのでおもしろいこととおもっています中に，子どもの遊びは少しかはり歌もかはりアーメンさえも歌にして歌うようになりました。子どもを育てることは何と云うむずかしいそして可愛くてにくらしいことなのでしょう。

子どもらはおそう式のまねさえして遊ぶので全くきもをつぶすほどおどろかされました。でも子どもらはまことすなほに云うことをきくので感心させられます。こんな子どもらをよく育てないことはつみだとおもいます。

八重子は子どもとたちとすごす中で生じる驚きや喜びを率直につづり，「こんな子どもらをよく育てないことはつみだ」と述べている。また，次のような記述もある。

子どもだからとほっておかないで　一緒に遊んでやらねばならないとおもいます。人は犬の子と遊ぶくせに自分の子どもと遊んでやらない。子どもは遊ぶことが命でもあり大切な宝物でもあるらしい。よくあそんでやりたい。そしてよく育ててやりたいものです。

八重子は子どもの遊び，とりわけ親と遊ぶことを大切にしていた。当時は和人の家庭でもアイヌの家庭でも，農作物の収穫は干ばつや洪水による影響を受け，生活は楽ではなかった。親が多忙であるがゆえに，子どもたちが日曜学校の催しを楽しみにしていた側面もあるだろう。先述のA氏は，次のようにも述べている。

八重さんの心情などを私の家族を含めて周りのものがどの程度分かっていたのか不明です。共生しつつ，少しずつアイヌと和人の結婚も進み，現在に至っていると思います。アイヌの家族はほとんど漁業をしていたのですが，豊かな家族は少なかったと思います。周りの和人は仲良くしようという関係だったと思います。

明治初期に私の先祖が有珠場所・会所を引き継いだ時には有珠にはアイヌの家族が81戸，397人（男性：210人，女性：187人）いたようですが，私の子どもの頃（昭和20年から30年代）はかなり減っていたように思います。それだけ生活が苦しかったんだろうと思います。八重さんの心情はこれらを背景にしているんでしょう。

(2) キリスト教の信仰，アイヌとしての誇り

キリスト教の伝道に一生を捧げ，養父母のバチラー夫妻に献身的に尽くした八重子であったが，バチラーがイギリスに帰国した後，生活は苦しかったようである。精神的，経済的支柱であったバチラーを失った寂しさや心細さから，実父富蔵への思慕を深めていたことも，雑記や歌などから推察できる。八重子は，自分に言い

聞かせるように，雑記帳に次のように綴っている。

異国の養父母に育てられ 幸せ又不幸せな自分である。（中略）真面目なことや親切なことをモットウとして神の僕として来ました。しかし弱い自分にはたえがたいことで，幾度脱線いたしたことでしょう。

我物はみなうしなうても　心ばかりはうしなはで　我てきをも心からあはれみ助くることは，いとよきことである。ウタリ（同胞）よおちぶれてもおおしくあれ。あはれみをわするな。神はただしき者をきっと守りたまう。

このような葛藤の中で八重子が貫いたのは，クリスチャンとしての敬虔さ，そしてアイヌとしての誇りとアイデンティティであり，その魂がこめられた歌が数多く遺されている。八重子の歌からは，アイヌの子どもたちへの思いも知ることができる。

おさなウタリ　エカシサンテケ（老翁の血統）
　からさずに　育てまつれよ　いついつまでも
すくすくと　育ちて実れ　ウタリ草
　繁れる茨も　神はのぞかむ
死人さえ　名は生きて在る　ウタリの子に
　誰がつけし名ぞ　亡びの子とは
（バチラー，2003）

八重子のアイヌへの願いや子どもたちへの思いと，博愛と寛容というキリスト教の教義との間で生じたであろう自らの葛藤は，彼女の歌集『若きウタリに』に結実している。金田一京助はこの歌集に次のような序文を寄せている。「同胞同族の悲しみは，まぎらわそうにもまぎれず，あきらめようにもあきらめ得ることではなかった。聖書を抱いて，いじらしきものの頭を撫でては祈り，罪あるものの背に向かっては跪いて祈り，明け暮れを，幼い者，弱い者の為に，祈り，祈り，祈り続けて目を泣き腫らしてきた女史の声は，終に『若きウタリに』の一巻を成したのである」（金田一，2003，p.5-6）。

八重子と親交を持ち，彼女の生涯を著書に著している掛川源一郎は，「八重子にとって，同族が礼儀作法を知らぬ無知な人間だと軽蔑されたり，未だに原始的な奇習を持つ人種だと観光客のなぐさみものにされることは，死ぬほどつらく耐えがたい恥辱であった（掛川，1988）」と記している。アイヌの少年が万引きをしたという新聞記事を見て，八重子が残念そうに「これだから日曜学校が必要なのよ」と呟いていたというエピソードもある（掛川，1988，p.254）。八重子が日曜学校において，アイヌの子どもたちに和人に劣らない教養をつけさせてやりたいと思っていた面は確かにあるだろう。しかしそればかりではなく，アイヌの言語や文化に生活の中で親しみながら，アイヌの子どもたちと和人の子どもたちが幼い時から共に遊びすごし，理解し合って対立を生じない環境を作ろうとしたのではないだろうか。1962年に八重子は京都にて倒れ78歳で生涯を閉じたが，それまで20年以上，有珠の教会で子どもたちと関わり続けた。

5．考　察

本研究の対象とした大正，昭和初期にかけては，アイヌがアイヌであることから逃れたいと願うほど，アイヌの子どもたちには厳しい教育環境があった。そのような時代における平取幼稚園と日曜学校の取り組み，ジョン・バチラー，バチラー八重子，さらに彼らをとりまく人々の思いを見ていくことで，次のような特質が浮かび上がってくる。

第一に，学齢期のアイヌの子どもたちが実質的に政府の同化政策の最中にいた時代，そしてアイヌの子どもたちだけを対象とした学校や教育課程があった時代に，平取幼稚園と八重子が催した日曜学校においては，子どもたちが就学後に課されたような，アイヌ語の使用禁止やアイヌ文化の否定はなかった。アイヌと和人の子どもたちが共にすごす環境において，アイヌ語訳の聖書や説話，アイヌの物語などが用いられていた。

第二に，上記のような環境を作ったバチラーや八重子は，アイヌの子どもたちも和人の子どもたちも，幼い時から分けへだてなく遊びすごすことが大切だと考えていた。当時は今日のように，共生や異文化理解といった言葉や概念が当然のように用いられていた時代ではない。しかし，バチラーはイギリスから日本に渡りアイヌの窮状を目にして以来，アイヌの人々の中に自ら飛び込んで彼らを理解しようとした人である。八重子もまた，アイヌに生まれバチラー夫妻の養女となりイギリスにも渡り，終生バチラー夫妻に献身的に尽くした。子どもたちが長じて異文化に溶け込むことの困難さを，身をもって認識していたのではないだろうか。

本稿の冒頭で述べたように，就学後のアイヌ

の子どもたちが同化政策や抑圧的な教育の元で，「シサムになりたい」，「アイヌということにふれないでほしい」と願う気持ちに陥る過程は想像に難くない。フレイレ（2018）は，被抑圧者には自分をとりまく秩序が抑圧者の都合に合わせて作られていることを，明確な方法で見極めることができないと述べている。そのため，秩序の中で抑圧者をモデルとみなし，抑圧者に追従し模倣する。これは「抑えがたい願望だ」（里見，2010，p.94）とフレイレは述べる。フレイレは，地主に抑圧されていた農民が監督者に昇進すると，かつての仲間であった他の農民たちにとって，地主以上に過酷な抑圧者になることを例に挙げている。バチラーや八重子は，子どもたちが言語や文化の否定を受け，自分はつまらない者だと思い込み，「シサムになりたい」という願望を抱く前に，アイヌと和人の子どもたちの間に共生の種が芽吹くことを期待したのではないだろうか。

時を経て1980年代初頭，アイヌで初めて国会議員となった萱野茂は，アイヌ語を教える保育所を平取町二風谷に設立しようとした。しかし，国の認可が下りず，現在は一般の保育所として開設されている。萱野は，「なんとかして，アイヌ語を子どもたちに教えようとしているのだが，なかなか思い通りにいかない」（萱野，2005，p.77）とその胸の内を明かしている。筆者らの調査によれば，北海道外の地域においては言うまでもなく，北海道においてもアイヌの言語や文化を取り入れた保育はほとんど行われていない。その一方で，平成29年告示の学習指導要領においては，アイヌに関する学習の拡充が盛り込まれた。2020年には国立アイヌ民族博物館が開館するなど，文化面でも注目が集まっている。バチラーや八重子，違星，萱野らの願いは，ようやく緒についたところかもしれない。

注

注１）バチラーの英名は Batchelor でありバチェラーと表した文献もあるが，本稿ではバチラー（2008）などの表記に合わせバチラーと記す。

注２）アイヌは複数の民族集団の総称である。そのため，子育ての方法もそれぞれの民族や居住地域により異なる。

注３）違星北斗の日記
http://iboshihokuto.o.oo7.jp/nikki.htm#Anchor-13107（2020年1月25日情報取得）.

注４）『子供の道話』大正15年10月，第２巻，第10号，pp.16-20.
http://iboshihokuto.o.oo7.jp/hanbunsiroi.html（2020年１月25日情報取得）.

注５）違星北斗の書簡 『子供の道話』大正15年９月，第２巻，第９号，p.27.
http://iboshihokuto.o.oo7.jp/kodomonodouwa.html （2020年１月25日情報取得）.

注６）実際には大正11年からだと思われる。

注７）後藤静香の書簡
http://www.kiroko.info/text_shigotou.htm（2020年１月30日情報取得）.

注８）上掲注３.

引用参考文献

バチラー，J.（1889）『蝦和英三対辞書』国立国会図書館デジタルコレクション，https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902998/1（2020年１月25日情報取得）.

バチラー，J. 村崎恭子校訂（2008）『ジョン・バチラー自叙伝 我が記憶をたどりて』，北海道出版企画センター.

バチラー八重子・掛川源一郎（1964）『写真集若きウタリに』，共同印刷.

バチラー八重子（2003）『若きウタリに』，岩波書店.

平取町立二風谷アイヌ文化博物館（2016）「平取町文化的景観解説シート75：ジョン・バチェラーと平取聖公会」
http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/2016/08/1241/ （2020年１月25日情報取得）.

知里真志保（2000）『和人は舟を食う』，北海道出版企画センター.

榎森進（2018）「アイヌ民族の歴史」，谷川健一・大和岩雄編『民衆史の遺産第13巻アイヌ』，pp.127-391，大和書房.

フレイレ，P. 三砂ちづる訳（2018）『被抑圧者の教育学50周年記念版』，亜紀書房.

貝澤正（1993）『アイヌわが人生』，岩波書店.

掛川源一郎（1988）『バチラー八重子の生涯』，北海道出版企画センター.

萱野茂（2005）『萱野茂：アイヌの里二風谷に生きて』，日本図書センター.

萱野茂（2020）『アイヌと神々の物語：炉端で聞いたウウェペケレ』，山と渓谷社.

金田一京助（2003）「序」，バチラー八重子『若

きウタリに』，pp.5-7，岩波書店.
松本成美・秋山達男・館忠良（1977）『コタンに生きる：アイヌ民衆の歴史と教育』，徳間書店.
松浦映子（2012）「北海道における明治期の幼児教育:札幌の公立幼稚園教師「西川かめ」の生涯から」，『藤女子大学紀要』，第49号第Ⅱ部，pp.195-201.
日本聖公会北海道教区平取聖公会（2009）「平取聖公会宣教百三十周年記念誌主に愛されて生きる：YESU EN OMAP」，北海道凸版印刷.
仁多見巌（1991）『異境の使徒：英人ジョン・バチラー伝』，北海道新聞社 .
小川正人（1997）『近代アイヌ教育制度史研究』，北海道大学図書刊行会.
更科源蔵（1996）「コタンの童戯」，谷川健一編『日本民族文化資料集成』，第24巻，pp.11-39，三一書房.
里見実（2010）『パウロ・フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』，太郎次郎社エディタス.
品川ひろみ（2016）「アイヌの家族形成と子育て」，『調査と社会理論』，35巻，pp.11-25.
末武綾子（1971）『バチラー八重子抄』，北書房.
竹ケ原幸朗（1976）「アイヌ教育史」，『教育学研究』第43巻，第４号，pp.298-309.
武隈徳三郎（1998）「アイヌ物語」，小川正人・山田伸一編『アイヌ民族近代の記録』，pp.351-372，草風館.

謝　辞

本研究に際しご協力頂きました，平取町町議会議員井澤敏郎氏，平取聖公会司祭内海信武氏，北見工業大学名誉教授大島俊之氏，日本聖公会札幌キリスト教会司祭大町信也氏，萱野茂二風谷アイヌ資料館館長萱野志朗氏，木呂子真彦氏，日本聖公会聖マーガレット教会佐藤さつき氏，藤女子大学准教授下田尊久氏，伊達市だて歴史文化ミュージアム学芸員伊達元成氏，有珠バカンス村プロジェクト畑谷博子氏，山本由樹氏（五十音順）に厚くお礼申し上げます。

付　記

本研究は JSPS 科研費 JP17K18643の助成を受けたものです。

本稿は2019年12月７日，日本乳幼児教育学会第29回大会における発表に加筆したものです。